

平成9年12月8日第3種郵便物認可
令和2年2月29日発行（季刊発行）第146号

HI
HAIKU INTERNATIONAL

2020
No.146



俳句ユネスコ無形文化遺産
登録推進協議会

時調と俳句の合同詩集－巻頭言
両国民族詩の発展に寄与

(社団法人) 国際時調協会 理事長 関炳道

「定型詩」は豊かな精神文化の価値を尊重してきた文化先進国ならではの品格高い大切な遺産です。要するに、漢詩、時調、俳句、和歌や西欧のソネット (Sonnet)、オード (ode)、ロンドー (rondeau) などとその代表的なものといえます。

複雑な現代文明の多様化たる秩序の関わりで出会いつつ一時的に色褪せたり、避けられぬ変化も体験しましたが、その地理的環境に置かれた民族情緒の根源は決して変わることはありません。荒波寄せた西欧の物質文明に対して東洋の近代化過程における時調と俳句はそれぞれの限界を自覚し、体質改善を試み、新しく変貌する可能性を見せてくれました。特に俳句の世界的な支持と普及の結実はグローバリズム時代としても示唆に富んでいると思います。

この度、叶えられた時調と俳句の合同詩集『野草の朝』は、両国の伝統美学の秩序が遠い過去から現代までを貫いており、持続的な発展とともに、韓・日、日・韓両国の精神文化の基底を理解し合う新しい転機を拵えることと思います。この詩集が完成まで陰になり日向になりお世話して下さいました国際俳句交流協会の有馬朗人会長と藤本はな先生の思いやりを深く感謝申し上げます。

この合同詩集の発刊をきっかけとなり、今後とももっと活発な定型詩交流の拡大を祈り、両国間の友好と国益増進にも寄与できることを期待いたします。労を惜しまず翻訳して下さいました安修賢教授と発刊にあたり韓国慶尚北道より多くの温かいご支援をいただきましたことにつきまして、厚く御礼申し上げます。

(2019年12月9日のシンポジウム講演内容は、
国際俳句交流協会ホームページをご覧ください。
<http://www.haiku-hia.com>)



2019年12月 9日 韓国時調詩人とHIA 俳句大会受賞者



シンポジウムにて

『詩語無境一東アジア短詩型文学について』

韓国の伝統詩「時調」を学ぶ

ミン・ビョンド氏講演ならびにシンポジウム報告

甲斐 由起子

2019年12月9日（月）、国際俳句交流協会主催で「東アジア短詩型文学について」の講演ならびにシンポジウムが駐日大韓民国大使館韓国文化院にて開催された。国際時調協会理事長ミン・ビョンド氏による基調講演を受けて、東京外語大学客員准教授チョン・ギイン氏、有馬明人先生、釜山大学民族文化研究所教授アン・スヒョン氏の発表があり、東京外語大学大学院教授で天為同人菅長（横井）理恵氏の司会で、登壇者の対話が行われた。以下に概要を記す。

I ミン・ビョンド氏基調講演…時調は「韓国の心」

韓国には、詩文学の本流として千年の歴史を持つ「時調」という定型詩がある。しかしながら、日本の俳句のように世界的な詩として確固たる価値を認知されていない。

「時調」という名称は、文献的には朝鮮王朝後期の『石北集』に記されているのを始めとするが、その発生は高麗時代にまで遡ることができる。時調は高麗存亡の危機に瀕した士大夫（両班）階層の自意識の発露と時代の要請により発生したが、時代が下るにつれ作者も王様から学者・文人・官僚・民・妓生と様々な階層に及んだ。時調に詠みこまれる素材や主題も多様化し、16世紀には韓民族の言葉と抒情を詠った民族文学として全盛期を迎えた。

時調は唱辞の形で調べに載せて伝承されたが、20世紀に入ると近代西欧の自由詩の影響や出版物を媒介とする価値秩序の拡張により未曾有の混乱を来す。「歌唱」という歌い方から、「紙面」中心の読む文学への変革を余儀なくされた。そこにいわゆる現代時調が登場し、絶頂期の70～80年代を経て、現代においては2000名あまりの時調詩人が活躍する。

時調の独自性を述べるなら、第一に構成が三章六句十二音譜・四十五文字（3, 4, 4, 4/3, 4, 4, 4/3, 5, 4, 3）だが、字数の型ではなく律格の型の定型を表すこと、第二に時調には漢詩の起承転結に似たルールを取り入れていること、第三に時調の原型は古時調と呼ばれる「単首」であり、時調美学の核心は均整と節制美にあることが挙げられる。時調が千年もの間、韓国詩歌文学の原形であり得たのは、時調が韓国人の心と美意識を守ってくれた「韓国の心」そのものだからだ。

II チョン・ギイン氏の発表…時調とは何か、なぜ、そしてどのように韓国を代表する伝統詩歌になったのか？

時調は「時節歌調」の略で、時代の流行り歌と言い換えられる。従って、時代によって形式、情調、作者層が異なる。日本の俳句は音数律だが、韓国の時調は音歩律の定型詩だという点が大きく異なる特長だ。音歩は等時性が維持される単位であり、3音節が歌として歌われるときは、4音節と同じ拍子で読める場合がある。

時調の形式と内容の関連性に関しては、リズムと内容が連動する起承転結

の形で作る。次に時調の変化に焦点を当てると、大きく4つの時期に分けられる。最初は高麗末から朝鮮初期（14世紀末～16世紀半ば）で、作者は士大夫（両班）、テーマは高麗亡国に対する哀歎や儒教的心性である。続く朝鮮中期（16世紀半ば～17世紀）の作者は士大夫と妓生でテーマは風流、朝鮮後期（18世紀～19世紀半ば）には平民も作者となり、両班を批判することもあった。植民地時代には日本を媒介として西欧文学への関心が高まるが、1920年半ばに韓国の知識層を中心に時調復興運動が始まり、日本の和歌や俳句と同様、より強く「朝鮮の特性」を持つ詩形式としての時調が復権した。近頃日韓関係が混乱しているが、今日のような文化的交流を通じて互いを理解し両国の関係を進展させる機縁になれば幸いだ。

Ⅲ有馬朗人先生の発表…「片歌について」

日本の文化は、漢字・儒教・仏教等も高句麗や百濟、新羅といった韓国を経由して入ってきた。韓国語と日本語には似た点があり同系列の言語だと考えられる。時調も日本で言えば、短歌に似ている。韓国固有文化の日本への影響としては、「吏読」と呼ばれる、送り仮名に相当する部分の表記に漢字を用いている用字法などは、万葉仮名のルーツではないかとも考えられる。

今日は、日本の俳句の起源についていささか私見を述べたい。俳句の起源は一般的には室町時代中期の俳諧の連歌だと言われている。しかし、私は古代の片歌が起源ではないかと考えている。片歌は、五七七五七七の形をとる旋頭歌の一方を指すことが多い日本武尊の「新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる」と御火焼の老人の「日日並べて 夜には九夜 日には十日を」が有名だが、実は、和歌の片歌として、五七五の形式を持つものもあり、その中には、季語を持つものもある。例えば、古事記にある日本武尊が逝去した後の場面で詠まれた「浜千鳥 浜よは行かず 磯伝ふ」のようなものである。従って、記紀歌謡の時代の片歌に俳句の起源があると言いたい。この片歌に注目した俳人には、江戸時代の建部綾足がいる。綾足は国学者でもある。

Ⅳアン・スヒョン氏の発表…和歌の心

藤原定家の歌論を研究しているアン・スヒョン氏より、『古今和歌集』の紀貫之著仮名序から和歌の創作に必要な要素として「心、詞、歌の姿」が挙げられた。さらに氏は俳句については、様々な喜怒哀楽を演ずる俳優に喩え、「俳」は喜劇性、「優」は悲劇性を示す言葉だと述べた。

Ⅴシンポジウム…登壇者間の対話、フロアとの質疑応答

登壇者相互のやりとりの最後に名司会者としてこのシンポジウムを盛り上げてきた菅長氏より、ミン氏と有馬先生に「よい時調、よい俳句の特長」についての質問があった。ミン氏は、「定型性に何を盛るのか。物を観察、思惟、インサイトのための実験、時代性を終章に歌い上げる、優しさと深さを兼ね備えた時調」と答えた。有馬先生は、良い俳句の基準として「意味が分かるか、声調が良いか、虚子の“深は新なり”のように新しみがあるか、伝統俳句なら季語の季感や本意が十分働いているか、無駄な言葉は入っていないか。」を挙げた。その後時調についてフロアから活発な質疑があり、盛況裡に散会した。

(天為誌より転載)

—— HI Club —— ①

MACHMILLER, Patricia J. (U.S.A.)

●
trying to see
the star-crossed lovers the earth
tilts a little

PARTRIDGE, Brent Alan (U.S.A.)

●
meditation
one foot lifted
a low winter rainbow

HRYCIUK, Marshall John Louis (CANADA)

●
two wires glint
through leaves
a squirrel hopping

YADA (U.S.A./FRANCE)

●
What is it in truth
that pulled me out of my sleep
the alarm or crows

STOPAR, Rudi (SLOVENIA)

●
Smell of cinnamon
wrapped in a long black shawl
a small girl is coughing

CAMPIOLI, Marco (ITALY)

●
Cherry blossoms
play young leaves as always
funny hide-and-peek

—— HI 選集 —— ①

マックミラー, パトリシア J. (アメリカ)

●
逢いたくも
幸うすき恋人たち
地球やや傾ぐ

パートリッジ, ブレント アラン (アメリカ)

●
瞑想中
足上げのポーズ…
低い冬の虹

リチューク, マーシャル ジョン ルイス (カナダ)

●
二本の鉄線が煌めく
葉の間から
栗鼠が跳ねる

ヤダ (アメリカ/フランス)

●
どっちなんだ
眠りを覚ますのは
目覚ましか鳥か

ストパール, ルデイ (スロベニア)

●
シナモンの香
長く黒いショールに包まれ
少女が咳き込む

カンピオリ, マルコ (イタリア)

●
桜咲く
若葉はいつも
かくれんぼ

WEST, Bill (U.S.A.)

●

When she hears the key,
to look as if she's waited,
puss runs to the door

ウエスト, ビル (アメリカ)

●

鍵の音
待ってましたと
ドアに猫

HANSEN, Hanne (DENMARK)

●

Warmer summers
butterflies from the south
flutter in the yard

ハンセン, アナ (デンマーク)

●

酷暑の夏
南からの蝶たちが
庭で羽ばたく

(松本彰二訳)

KURODA, Motoko (U.S.A.)

●

Being monogamy
salmon frantically
go up river

黒田素子 (アメリカ)

●

一夫一妻
鮭達必死の
河のぼり

(自訳)



—— HI 選集 —— ②

安原 葉 (長岡)

●

露けしやーと日の家居また旅へ

谷川章子 (福岡)

●

川沿ひは虫の浄土や漫ろ歩す

平野哲斎 (東京)

●

春泥に転べば土の匂ひかな

和田とし子 (東京)

●

草の穂に磯の風くる無人駅

澤野藤子 (石川)

●

トンネルを出れば炎天日本海

可々子 (三重)

●

風鈴の音の寺門をくぐり入る

—— HI Club —— ②

YASUHARA Yo

●

Autumn dew ...
only a day at home
and travelling again

TANIKAWA Fumiko

●

The river-side
is a paradise for crickets ...
I'm rambling along

HIRANO Tessai

●

Falling down
onto the spring mud ...
an earthly aroma

WADA Toshiko

●

Deserted station ...
a breeze from the beach
reaches the ears of grass

SAWANO Fujiko

●

Out of the tunnel
I meet the Japan Sea
under a burning sky

KAKASHI

●

Passing through the gate
of a temple
I hear the wind-bell

大久保幸子（東京）

●
丸ビルの伸びし影踏む九月かな

OKUBO Yukiko

●
September ...
stepping on is the longer shade
of the Marunouchi Bldg

大慈弥爽子（習志野）

●
よべ荒れし闇に今宵の虫しぐれ

OJIMI Soko

●
Stormy last night ...
stormy voices tonight
of crickets and grasshoppers

陳宝来（沖縄）

●
ふるさとの変はりて月の観音山

CHIN Horai

●
My hometown has changed ...
the moon shines
over the Kannon-Mountain

小滝眞珠雄（千葉）

●
来る度に大型化する台風禍

KODAKI Masuo

●
Each and every time
the typhoons more powerful
and the damage more

石綿久子（東京）

●
蛸やこんな所に一軒家

ISHIWATA Hisako

●
An evening cicada ...
an isolated house
in such a place

渡邊美奈子（神奈川）

●
舗道打つ音も弾みて緑雨かな

WATANABE Minako

●
The early-summer rain
splashes against the pavement
brightly

—— HI 選集 —— ③

山崎ひさを (神奈川)

●

佳きことを祝ぐ佳き言葉菊日和

—— HI Club —— ③

YAMAZAKI Hisao

●

With excellent words
I commemorate happiness ...
fine chrysanthemum days

大高霧海 (東京)

●

北斗星柄杓に掬ふ花火屑

OHTAKA Mukai

●

With the dipper
the Great Bear dips
the fireworks

西上禎子 (大阪)

●

高波のなほも岬打ち野分あと

NISHIGAMI Teiko

●

The heavy waves
are still lashing the shore
after the wintry blast

菊池幸恵 (茨城)

●

独り居の伯母の小さき冷蔵庫

KIKUCHI Sachie

●

My aunt's fridge
is small enough
living alone

古郡孝之 (さいたま)

●

山の湯の一人に余る天の川

FURUKORI Takayuki

●

The Milky Way
is too much for me
the hot spring in mountain

真鍋郁子 (東京)

●

夏野行く木道まぶし風あまし

MANABE Ikuko

●

The plains in summer ...
the boardwalks are dazzling
winds are gentle

小畑晴子（大阪）

●
栗飯や丹波焼きなる箸枕

OBATA Haruko

●
The chestnuts rice ...
chop rest
made of Tanba ceramics

相沢恵美子（横浜）

●
鵜の声の透き通りたる秋の浜

AIZAWA Emiko

●
Cormorants
with clear voices ...
the autumn beach

葎（宮崎）

●
コスモスがひとゆらぎして友逝けり

MUGURA

●
Cosmoses
waved together by a wind ...
my friend passes away

加瀬谷敏子（秋田）

●
廃村の杭にかなかな笹せり

KASEYA Toshiko

●
Stakes
of a deserted village ...
evening cicada echoes

西田梅女（金沢）

●
新涼の風の虜となる刹那

NISHIDA Umejo

●
A moment
I'm charmed by the wind ...
early autumn

染川清美（大阪）

●
十五夜のゆったり明かる家並みみなかな

SOMEKAWA Kiyomi

●
A full moon night ...
rows of houses
slowly turn on lights

—— HI 選集 —— ④

松山芳彦 (埼玉)

●
夕影に鳴く蜩の声飽かぬ

秀 夫 (弘前)

●
コーヒーを挽きて休日梅雨籠り

望月よし生 (北海道)

●
みだれめく御空の声や練雲雀

悟 (愛知)

●
令和なる新年号や若葉萌ゆ

工藤眞一 (東京)

●
抜きんでて見晴らすごとくをみなへし

山戸暁子 (堺)

●
音たてて流れるごとし天の川

—— HI Club —— ④

MATSUYAMA Yoshihiko

●
In the shade of evening
song of a cicada
never boring

HIDEO

●
on a rainy holiday
confine myself to the house
milling coffee beans

MOCHIZUKI Yoshiwo

●
L'alouette en été –
Il paraît que sa voix tremble
sous la voûte céleste

SATORU

●
The new era's name
meaning Fine-Harmony
budding young leaves

KUDO Shinichi

●
Hervorragend
sieht der Goldbaldrian aus,
als blickte er ringsherum

YAMATO Akiko

●
Die Milchstraße fließt,
als ob sie rauschen würde.
Ich höre es klar

鈴木石花（群馬）

●
桐生発溪谷電車秋うらら

SUZUKI Sekka

●
the starting station Kiryu
of the valley train
a lovely fall day

飯田双樹（東京）

●
蝉追ひし浴衣の子等や楽しげに

IIDA Soju

●
joyful boys
are searching
for a flying cicada

福島芳子（埼玉）

●
エルミタージュ青色映え雪に浮かぶ

FUKUSHIMA Yoshiko

●
Ermitazh museum
glowing with blue
stand out of snow

片山タケ子（茨城）

●
蔦かずら冠にしてダンテの忌

KATAYAMA Takeko

●
Putting on a crown
made of climber ivy
the anniversary of Dante's death

森田みさ（宝塚）

●
ドローン見張るかに屋根の端かな青鷺は

MORITA Misa

●
As if on the alert for drones
at the edge of a roof-top
a gray heron stands

結葉やよひ（神奈川）

●
乗り換えの駅を彩る浴衣かな

YUNA Yayohi

●
Many yukata
coloring
a transfer station

磯 直道 (埼玉)

- 梅雨曇りはや灯をともし屋形船

ISO Naomichi

- Under rainy season clouds
the *Yakata* boats
already lighting up

小上栄女 (和歌山)

- 干梅を一つ攫みて旅立ちぬ

OGAMI Shigejo

- After eating
one dried plum
head overseas

(HI 選集④自訳)

HI 145号35ページに誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

栗山緑

《誤》「シャワーの響き」 → 《正》「シュワーの響き」

お知らせ

HI 誌は146号より、町春草さん揮毫の「春夏秋冬」のように季刊となります。今後は新しい試みとして優秀句に選評をつけることとなります。

「会員コーナー」への投稿もお待ちしています。原稿の掲載は編集長一任です。

Announcement

From this issue, HI will become a quarterly magazine with one issue for each of the four seasons, just as they are shown on the cover in characters written by the late Machi Shunso, a renowned calligrapher.

In each issue, some haiku will be picked up by HIA directors for additional comment. We are also seeking contributions to the “Member’s essay” corner at the back of the journal. Selection will be made by the editor.

—HI 146号 投句作品より / From HI No.146—

【選評】

HIA 理事 佐怒賀正美 selection and review by Masami Sanuka, HIA director

■第1位■

MACHMILLER, Patricia J. (U.S.A) / マックミラー, パトリシア J. (アメリカ)

trying to see / the star-crossed lovers the earth / tilts a little
逢いたくも / 幸うすき恋人たち / 地球やや傾ぐ

(評) 発想のスケールの大きな句。星まわりは悪いが、なんとか逢おうとしているけなげな恋人たちがいる。しかしながら、この地球は、戦争や温暖化や気候変動、原発事故などで、すこし傾き始めている。恋人たちはこの傾いだ世で、薄幸ながら思いの深い恋を成就できるのか。はらはらしながらも、作者はあたたかな目で恋人たちを見守り励ましているように見える。

Here's a haiku with a large-scale conception. The "star-crossed lovers" are trying hard to meet each other. The earth is beginning to "tilt a little," in the face of wars, climate change, and nuclear accidents. I wonder whether or not the couple's passionate love may blossom on this planet. The concerned writer seems to be warmly watching and encouraging the lovers.

■第2位■

PARTRIDGE, Brent Alan (U.S.A) / パートリッジ, ブレント アラン (アメリカ)

meditation / one foot lifted / a low winter rainbow
瞑想中 / 足上げのポーズ… / 低い冬の虹

(評) 軽いユーモラスがほのぼのとする作品。冬の片虹であろうか、作者は低い虹の弧を見たたん、ヨガの片脚を上げるポーズのようだと感じた。天空の神の所作か。第一行に、「瞑想」の静かな時間が流れているところもよい。三行とも名詞を中心にした簡潔な単語をおくシンプルな構成の句であ

崇高な理念をより確固なものに

新潟県出雲崎町長 小林則幸

出雲崎町は新潟県内の海岸線のほぼ中央に位置します。漁業と観光の町・出雲崎町は江戸時代、湊と北國街道の陸海路を備えた要衝の地として大変栄えた地であります。

江戸時代、出雲崎は越後で最初の幕府直轄地（天領）であり、佐渡からの金銀荷揚げ地として賑わっておりました。今でも間口の狭い民家（妻入り）が街道に沿って立ち並んでおり、この様は当時の繁栄の名残でもあります。また、海運による物資の供給が盛んに行われた北前船寄港地（日本遺産認定）や聖僧・良寛さんの生誕の地として知られております。

江戸時代は政治的には幕領体制の中にあり、経済面では湊を中心とした商業資本が確立した反面、教育・文化においては組織的な活動が見られず、こうした状況下で俳諧が受け入れやすい形で入り込み、出雲崎の文化史の中心として形成されていきました。

元禄2年（1689）「おくの細道」の途次、松尾芭蕉は出雲崎で一泊し、名吟「荒海や佐渡によこたふ天河」を詠んでおります。芭蕉の影響がその後の出雲崎の俳諧史を華やかに彩ることとなりました。

その後、出雲崎に多くの文人墨客が来杖することとなります。俳人では、芭蕉の門人で美濃派の祖となった蕉風十哲の一人・各務支考を始め、摩詰庵雲鈴、仙石盧元坊、加藤暁台等々の当時名を馳せた俳人、そして、現在に至る間も多くの著名な俳人が来遊しております。

町内にある芭蕉園には、芭蕉が出雲崎を訪れた時から300年を記念して建てられた芭蕉の銅像とともに、芭蕉の俳文「銀河の序」の石碑が建立されています。傍らには俳句ポストが置かれ、観光客は思い思いに投じ、優れた句は毎月の町広報誌に掲載しております。

俳諧の影響を受け、町には現在、「越後出雲崎渚会」と「西乃越句会」が活動し、その両句会が主宰して「奥の細道天の河俳句大会」を開催しております。毎年、県内外から俳句愛好者が参集し、熱のこもった大会となっております。さらに、町内の小学校4年生以上を対象に、地元俳人を指導者として「俳句教室」を行っております。活字離れが進む子ども達にとって言語・表現能力の助長、豊かな感性を育てる上で貴重な文化の体験であります。

俳句文化は古今東西普く日本人の心に根付いてまいりました。今は、海外でも俳句が広く愛好されております。例え、言語・生活様式が異なっても、創造力の喚起、豊かな表現など定型詩として、そこに流れる俳句の崇高な理念を疑う余地は一片もありません。関係する皆様とともに俳句文化がユネスコ無形文化遺産に登録されることを願って止みません。